

海野敏著『バレエの世界史：美を追求する舞踊の600年』

山田小夜歌

本書は、その萌芽から現在にいたる約600年というバレエの歴史を世界史の流れに沿って綴るというユニークな著作である。言うまでもないことではあるが、バレエの通史を書くというのは大変なことである。バレエの歴史が西欧というある程度限定された地域を中心に展開されているとはいえ、当然ながらその西欧社会のありようも一様ではない。地理的にも、社会的にも、文化的にも異なるコンテキストが時に重層的に重なり合う中で、同時発生的に起こるトピックスをいかにして一冊にまとめるのか。まして600年という気の遠くなるような時間的あゆみを通観するように描くとなれば、とんでもなく難しい仕事であることがわかるだろう。もっとも、著者自身があとがきの中で触れているように、バレエ通史はもちろん、時代や地理を限定したバレエ史、舞踊史関係の書籍は一般書、学術書を問わずすでにくつも存在している。本書のオリジナリティは、おおよそ世紀ごとに区切られた各章の冒頭でまずその時代背景や社会状況を展望し、そのうえで同時代のバレエのありようを紹介していく叙述スタイルにある。ただし、それらの時代描写は単にバレエ史の「バックグラウンド」として補足的に説明されるばかりではない。誰もが知っているような歴史上の事件や人物たちとバレエとのかかわり、政治や経済などの社会情勢がバレエの存立に与えた影響、同時代の思想、美術や音楽、文学、演劇といった文化状況とバレエとの関連など、全編を通して常に当該時代を俯瞰しつつバレエの事象が綴られる。これにより、バレエという舞踊世界の多層的なありようを鮮やかに描き出すことに成功している。

本書は全10章に序章と終章を加えた構成から成り、巻末には関連年表も収録されている。まず序章では、本書であつかわれる「バレエ」史の範疇が示される。筆者は「バレエ」を「ターンアウトをした脚の基本ポジションを有するダンス・デコールと呼ばれる舞踊技法を軸とし、自らを創造的に革新する意思を宿したアーティストックなダンス」(7)と定義したうえで、バレエ萌芽の起点を15世紀イタリアに定め、現在までのバレエ史の見取り図を提示する。続く10の章では、バレエ史において鍵となる、あるいは各時代を象徴するようなバレエ教師や振付家、ダンサー、興行師、バレエ作品などを具体的に取り上げつつその歴史展開が記述される。第1章では15世紀イタリアの都市貴族を中心に、宮廷内で彼らが自ら踊り楽しむ余興としてのダンスについて説明され、筆

者がバレエの萌芽をルネサンス期イタリアのダンスと言い得る根拠が示される。第2章ではイタリアからフランス王家へ嫁いだカトリーヌ・ド・メディシスを中心に、16世紀ヴァロア朝の宮廷で催された祝典における余興としてのダンスについて説明される。第3章では17世紀フランス絶対王政期の宮廷における儀式、儀礼としてのバレエの機能や性格が説明される。また、ボーシャンによる理論化や舞踊記譜法の考案を経てバレエが宮廷から劇場舞踊へと移り、ダンサーの専門化、職業化へと向かうさまが記述される。第4章では18世紀フランスを中心としたオペラ・バレエの流行とバレエのヨーロッパ各地への広がりについて、第5章ではオペラとバレエの分離とノヴェールらによるバレエ改革について述べられる。第6章では二重革命を経て近代化の道を進んだ西欧社会が劇場バレエへおよぼした影響と、ロマンティック・バレエの隆盛が技法や作品、ダンサーとともに説明される。第7章では19世紀後半西欧でバレエが衰退へと向かいその主舞台がロシアへ移っていくこと、その帝政ロシアでプティパを中心にクラシック・バレエが確立されたことが述べられる。第8章ではバレエ・リュスが芸術界にあたえた衝撃とその活躍、そこからグローバルに広がったバレエの展開が紹介される。第9章では第二次大戦以降20世紀のバレエ表現の深化と高度化、さらなる国際化と大衆化への過程が、振付家、ダンサー、バレエ団の活動とともに綴られる。第10章では21世紀序盤から現在に視点をむけ、高度に情報化する社会とバレエの関係、社会正義に対する意識の高まりとバレエ界を取り巻く状況が述べられる。

世界史の流れとともに綴られるバレエ史記述を通して筆者が読者に提示するのは、バレエというダンスの発展がまさに、西欧社会の近代化、モダニズムという歴史的経緯と歩調をあわせるがごとく成し遂げられたとする主張である。筆者は終章においてバレエの「美」の真髄をモダニズムの極致として位置づける。すなわち、バレエが近代西欧で様式を整えた出自にしても、非西欧圏におよんでいく国際化、大衆化のプロセスにしても、たびたび大きな変化を遂げつつ発展してきたバレエが有する創造的な自己変革志向にしても、さらには体系化され身体の効率化を極める「ダンス・デコール」という舞踊技術の合理的なありようにしても、それらすべてが進歩主義にもとづくモダニズムの原理につながっているというのである。本書はバレエ通史を紹介しつつ、筆者のバレエ史理

解におけるひとつの結論を明確に提示している。

ところで本書では、序章で示された「バレエ」の定義が一本軸となって展開されていくのだが、ここで筆者は「ターンアウト」「ダンス・デコール」というバレエテクニクの基本についてもわかりやすい解説を加えており、バレエになじみのない読者にも目配りがなされている。以降の章においても、折に触れてパヤポーズなど「ダンス・デコール」の舞踊技術に言及しながらバレエ技法発展の過程や作品における振付の特徴を説明しており、バレエという視覚芸術をより立体的に描出しようとする筆者の姿勢がうかがえる。舞踊を言語のみで表現するのは極めて困難なことである。本書においてそれを可能にしているのは、筆者らが取り組んでいるという「バレエの振付を三次元デジタルデータから自動・半自動で生成する実験」(274-275) 研究の成果はもちろん、30年以上にもわたって毎年100数十本の舞台を観ているという、バレエ批評家としての筆者の観察眼が活かされたことによるのではないだろうか。筆者自身が本書中で述べるように、バレエには「現前の美」(291)、すなわちその日その時1回限りであるという舞台芸術特有の性質が備わっている。筆者の豊富な観劇体験にもとづいた知見に支えられつつ臨場感をもって立体的に描かれるバレエ史記述は本書の大きな特徴といえよう。

一方で、多少気になる点もある。一般向け書籍という性格上、また筆者自身もまえがきで「バレエ史の細部に立ち入り過ぎることなく」(i)と断っているのに蛇足を加えることになるかもしれないが、ひとつ挙げておきたい。それはプティパの振付に関する言及である(7章)。本書はプティパの振付の特徴の一つに「その立体的で幾何学的な造形美」(186)を挙げ、続けてソロと群舞それぞれに詳細な説明を加える。ソロについては、「偏りと狭まりを排し、常に調和を保った四肢で空間を分割する均整のとれた配置と動作、すなわちポーズとステップの美しさが常に強調されるよう仕組まれている」といい、プティパは過去を継承しつつ「ダンス・デコールで鍛えられたバレエダンサーの身体が、調和と均整の取れたポーズと、安定感があって優雅なモーションとを創り出し、最大限美しく見えるような振付を作り続けた」という(186)。確かにプティパ原振付の作品は現在も頻繁に目にする機会に恵まれるが、読者に、あたかも19世紀当時の振付そのままに今日まで上演され続けているような印象を抱かせはしないだろうか。プティパ振付作品の多くはステパノフ考案の方式による舞踊譜が残されており、20世紀以降、《眠れる森の美女》《パヤデルカ》《白鳥の湖》を含む複数の作品の復元上演も行われている。一方で、舞踊譜から元の振付を完全なかたちで再現することは困難であるとの指摘もなされて

いる。さらに、筆者が言及する「ソロ」に関しては、当時とくに主役級の場合、バレエダンサーの裁量に多くを頼っていたり、別作品の振付を転用して踊るケースもままあった。つまり、われわれが今日確認し得る「プティパの振付」は、必ずしも彼自身によってのみ構築されたものとは限らない。プティパ作品、とりわけ「ソロ」の振付に対する評価には慎重な議論が求められるのではないか。本書では学術書のような出典の明示がないため、先述した著者の評価の根拠が判然としないことが惜しまれる。

本書においてはいくつか情報の精査が必要と思われる記述も認められた。ここでは日本のバレエに関する点をふたつ指摘しておく。ひとつめは、1922年のアンナ・パブロワによる来日公演についてである。本書では東京(帝国劇場)での公演に加え、神戸、岡山、広島、下関、長崎を巡演したとあるが(225)、近年の研究を参照する限り、巡演先は横浜、名古屋、大阪、神戸、京都、岡山、広島、博多、門司である。ふたつめは、小牧正英がエリアナ・パブロバ(本書中では「エリアナ・パブロワ」)の指導を受けたとする記述である(226)。小牧がエリアナの教え子とともに「戦後日本のバレエ界を担うダンサー」(226)として活躍したことにちがいはないだろうが、エリアナから直接指導を受けたという事実はない。

むろん、これらは本書における筆者の壮大な試みと提示された論旨を損ねるものではない。平易な表現と軽妙な筆致で21世紀現在までのバレエ史を活況する本書は、バレエになじみのない読者にも、またバレエ愛好者にも推奨される優れた案内書である。舞踊研究においては、文化史や社会史的な視点にもとづいた研究が盛んに行われつつある。本書が提示した「世界史」と「バレエ」を関連づけるアプローチと両者の不可分な関係は、さまざまな舞踊とその歴史研究にも重要な視座をあたえてくれるにちがいない。

参考文献

- 川島京子『エリアナ・パヴロバ 日本バレエの母』早稲田大学出版部、2012。
- マチルダ・F.クシェシンスカヤ『ベテルブルグのバレリーナ クシェシンスカヤの回想録』関口紘一監修、森瑠依子訳、平凡社、2012。
- Wiley, Roland John, "Dances from Russia: An Introduction to the Sergeyev Collection.", *The Harvard Library Bulletin*, 24(1), 1976.
- , *Tchaikovsky's Ballets: Swan Lake, Sleeping Beauty, The Nutcracker.*, Oxford: Clarendon Press, 2003.

(中公新書、2023年3月刊行)